

聖書:列王記第二10章28~36節

説教:しかしエフーは

はじめに

今日のところに入るまえに、前回までのあらすじを振り返ります。北イスラエルの七代目の王であったアハブは、家の隣にあったぶどう畑を見て欲しくなり、持ち主のナボテと交渉をします。ところがナボテは先祖が神から譲り受けた土地を他人に売りわたすことは絶対にできないと言って断る。これを聞いたアハブの妻イゼベルは策略をめぐらし、偽りの証人を立てて裁判を起し、合法的に殺してしまいます。これがナボテの畑事件と呼ばれるものでした。

## 1 エフーの業績

### 1) 主に従う

この一部始終をご覧になっていた神は、アハブの子孫に必ずわざわいをもたらすと約束し、事件から三十年後に事態が動き出す。主は、預言者をエフーのところに遣わし、「あなたがイスラエルの王となるのだ」と告げ、次のように語ります。「あなたは、主君アハブの家の者を打ち殺さなければならぬ。こうしわたしは、わたしのしもべである預言者たちの血、イゼベルによって流されたすべての主のしもべたちの血の復讐をする。」

これを聞いたエフーは、すぐに自分の主君であったヨラムを倒し、次にイゼベルを城壁から突き落とし、王の子どもたち七十人の首をとり、異教の神々であったバアルを熱心に信じる者たちを町から根絶やしにしていった。これが前回までのあらすじです。

### 2) バアルを根絶やしにした

これまで数回にわたってエフーのしたことを見てきたわけですが、毎回毎回、人の血が流され、時には首を切られるような残酷な場面が続いてきましたから、エフーはどうしてこんなひどいことをするのかと不審に思った方もいるかもしれません。しかし、イゼベルと夫アハブがしたことを忘れてはならない。この二人はイスラエルの人々に対してバアルの神々を拝むように強制し、主の預言者たちを皆殺しにしたばかりではありません。正しいことはねじ曲げられ、嘘偽りが白昼堂々王の口から語られ、人々は王から理屈の通らない理不尽な命令が出て、報復が恐ろしくてもだれも反対で

きず、ただ従うことができなかった。そういう国になってしまった。だれが聞いてもひどい話です。

もちろん、心を痛める信仰者もいました。その一人がヨナダブという人で、このように霊的に乱れ、罪に墮落しきってしまった町の人々と一緒に暮らすことことに我慢ができなくなり、町を出て荒野に天幕を張って住む道を選びました。町の人々はそんなヨナダブを見て、偏屈男とか、変わり者と言ってあざ笑ひ、自分たちが霊的にどんなにひどい状態なのか一切顧みようとはせず、悔い改めもしません。

エフーが残酷なのではありません、イゼベルとアハブは、このように残酷な結末を招くようなことを、自分の手で行ってきたと言うべきなのでしょう。私たちは「神のさばき」と聞くと恐ろしいと思っ、それ以上考えまいとする傾向があります。でも、ときどきは考えておいた方が良いでしょう。私たちがどこから救われたのか。罪に対する神のさばきのおそろしさを思えば、救われたことがどれほど感謝な事かと感じられるのです。

### 3) しかしエフーは

主はエフーに対してこのように語ります。30節「あなたはわたしの目になつたことをよくやり遂げ、アハブの家に対して、わたしが心に定めたことをことごとく行ったので、あなたの子孫は四代目まで、イスラエルの王座に就く。」主からの評価は少し微妙です。「よくやり遂げた」と言いながら、このことばの前と後ろには、まったく正反対のことが書いてある。29節はこうです。「ただしエフーは、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪、すなわち、ベテルとダンにあった金の子牛に仕えることから離れようとはしなかった。」31節はこう。「しかしエフーは、心を尽くしてイスラエルの神、主の律法に歩もうと心がけることをせず、イスラエルに罪を犯させたヤロブアムの罪から離れなかった。」これはどういうことか。

### 4) なぜ「不都合なこと」に言及するのか

皆さんがよくご存じのピラミッドは、古代エジプトの王が建てたと言われ、そこには王たちの業績を石に刻んだ文章が残っていて、調べるとおもしろいことが分かる。戦争に勝ったというような都

合のよい業績は書いてあるけれど、都合の悪いことは書いていない。もっとすごいになると、前の王が書いた文章の中に、自分にとって都合の悪いことがあったりすると、そこをわざわざ削ったり、上書きしてしまったりする。今でも行われていますが、いわゆる公文書改ざんです。それが王の歴史書というものの性質ということ。ところが聖書はどうか。聖書もイスラエルの王の業績を書き記した公文書という面はあります。ところがほかの国の公文書と大きく違うのは、不都合な真実もそのまま載せていることです。聖書だからと言えばそれまでですが、なぜそういうことをわざわざするのでしょうか。

## 2 ヤロブアムの罪

### 1) 北イスラエルの初代の王となる

そのことを考える前に、エフーが犯した罪として何度も言及されている「ヤロブアムの罪」とはいったいどのようなものであったのか。そのことを確認しておきましょう。時代はさかのぼって、ダビデの息子であるソロモンが亡くなって息子のレハブアムが新しい王となったときのこと。代替わりになって、それまで押さえてきた不満が噴出します。何が問題になったかという、ソロモンが課してきた重い税金と苦役のことでした。人々は生活が大変なので、税金を軽くするようにレハブアム王に陳情します。ここでそうですかと言って減税措置をすれば事は大きくならなかったのですが、レハブアムは減税はまかり成らんと行って強く拒否してしまう。その結果もうやっつけられないということになり、南ユダと北イスラエルに分裂してしまった。そのとき北王国の初代の王となったのがヤロブアムという人で、もともとはソロモンの下で働いていた公務員です。彼はあるときアヒヤという預言者に出会って、「ソロモンの王国から十部族をあなたの手を与える」ということばを聞いて、その気になったのでしようソロモンに逆らうのですが、成功せずエジプトに逃げた。それから何年かしてソロモンが亡くなり、イスラエルに戻ってきた。それで人々は、ヤロブアムを王としてかつぎ出したということ。

### 2) 神々を作りあげ、礼拝をさせる

こうして北イスラエルは、勇ましく啖呵を切つてユダと袂を分かつことになったのですが、はたと困ったことが起きた。これまでお祭りだとか、お参りということになれば神殿があるエルサレムに行けばよかった。ところがエルサレムは南王国に

ある。行けなくなってしまった。ヤロブアムはどうしたか。このまま手をこまねいていたら必ず不満が爆発する。そうしたら自分の政治生命も危ない。そこで彼は、金の子牛を二つ作らせ、人々にこう語った。「もうエルサレムに上る必要はない。イスラエルよ、ここに、あなたをエジプトから連れ上った、あなた神々がおられる」と叫んで、これを拝ませたばかりでなく、レビ族だけしか祭司になれなかったのに、一般人から祭司を任命し、祭りの日も勝手に決めるというように、だんだんエスカレートしていく。もちろんこれは律法に対する重大な違反行為です。神は、預言者を遣わしてなんとか警告しても、まったく聞く耳を持たない。それで神は最後にこのように告げるのです。

「だから見よ。わたしはヤロブアムの家にわざわいをもたらす。(中略)ヤロブアムに属する者は、町で死ぬなら犬がこれを食らい、野で死ぬなら空の鳥がこれを食らう。」(列王記第一14章10~11節)これは、あのアハブに言われたのとまったく同じことばです。

エフーの話に戻ります。彼は、主を捨ててひどい罪を繰り返していたアハブの家の者を滅ぼしたところまではよかったのですが、気がつくやうにエフーも金の子牛を拝んでヤロブアムと同じ罪を繰り返し、そのことを聖書は包み隠さず書いてある。このことをどう考えたらよいのでしょうか。

## 3 人の罪と救い(イザヤ59章16節)

### 1) 人を頼っても失望する

エフーも最初の頃は、あのヨナダブと心が通じあえるほど、忠実な信仰者でした。ところが王の座に就き権力を握ると、主から離れ、主の律法からも離れてしまう。イスラエルにはもっとまともな王はいなかったのかと首をかしげたくなる。そもそも神がエフーを選んだところからボタンをかけ間違えたのではないか。そんな疑問も湧いてくるかも知れません。

そこでまず確認しておきたいことはこうです。神は全能であり、また間違えるということもない。これは神の大切な性質です。ですので神がエフーを選んだのは間違いだったというのは、適切ではない。神はエフーがこうなることをご存じでありながら、それでも彼を選んだということ。なぜわかっているながら選ぶのか。答えは単純です。王の器にふさわしい人物がほかにいなかったから。北と南には合わせると三十九人の王がいるなかで、それでもエフーは良い王さまとして数えられているの

です。つまり、神はベストではないけれど、ベターな人物を選んでる。

このことから何が言えるか。こうして選ばれたエフーでさえ道をそれてヤロブアムの罪を犯したというのなら、いったいどこに完璧といえるような忠実な信仰者がいるのか。だれもないということです。聖書がイスラエルの王の歴史を記すときに、不都合な真実も包み隠さず書き記すのは、これを言いたいからです。どんなにすばらしく見える王であっても、人であるならば、必ず裏切られる。

このことを預言者イザヤはこう言いました。イザヤ59章16節です。「主は人がいないのを見て、とりなす者がいないことに啞然とされた。」

## 2) 神に失望することはない

神は私たちをご覧になって、とりなす者、すなわち罪から人を救える人がだれも見つからないと言います。だから、神は決心された。「ご自分の御腕で救いをもたらし、自分の義を支えとした。」人が人を救うことは絶対にできない。それで神ご自身が救い主となられイエス・キリストとして私たちのところへ来られた。人の力ではなく、ご自分の永遠の義をもって十字架の救いを成し遂げてくださったのだと語ります。

私たちはすばらしい人を見つけると、大きな期待を寄せます。ところが限界があるわけですから、期待がいつかは裏切られ、その反動で怒りさえ覚える。結局その繰り返ししかない。

いったいだれが私たちを救うことができるのか。聖書は告げます。地上にはいない。でも落胆しなくてよい。神に期待してよいからです。本当に大丈夫でしょうか。イザヤはこう言っています。「わたしを待ち望む者は恥を見ることがない。」(イザヤ49章23節)

この方に望みを起きながら今週も歩んでまいります。